

# 聖大土曜日

## 晩課

大阪ハリストス正教会

2016年4月

# 聖大土曜日晩課

司祭 我等の神は恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、  
誦経 「アミン」

我等の神よ、光栄は爾に帰す、光栄は爾に帰す。

誦経 **【天の王】**

天の王、慰むる者よ、真実の神<sup>o</sup>、在らざる所なき者、満たざる所なき者よ、萬善の宝蔵なる者、  
生命を賜ふ主よ、来りて我等の中に居り、我等を諸の穢より潔くせよ、至善者よ、我等の靈  
を救ひ給へ。

誦経 **【聖三祝文】【至聖三者】【天主經】**

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。(三次)

光栄は父と子と聖神<sup>o</sup>に帰す、今も何時も世世に、「アミン」

至聖三者よ、我等を憐め、主よ、我等の罪を潔くせよ、主宰よ、我等の愆を赦せ、聖なる者よ、  
臨みて我等の病を癒し給へ、悉く爾の名に因る。

主憐めよ。(三次)

光栄は父と子と聖神<sup>o</sup>に帰す、今も何時も世世に、「アミン」

天に在す我等の父よ、願はくは爾の名は聖とせられ、爾の国は来り、爾の旨は天に行はるるが  
如く地にも行はれん、我が日用の糧を今日我等に與へ給へ、我等に債ある者を我等免すが如く、  
我等の債を免し給へ、我等を誘に導かず、猶我等を凶悪より救ひ給へ。

司祭 蓋国と権能と光栄は爾父と子と聖神<sup>o</sup>に帰す、今も何時も世世に。  
誦経 「アミン」

主憐めよ。(三次)

光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世世に、「アミン」

誦経 来れ、我等の王・神に叩拜せん。

来れ、ハリストス我等の王・神に叩拜俯伏せん。

来れ、ハリストス我等の王と神の前に叩拜俯伏せん。

誦経 **第103聖詠**

我が靈よ、主を讃め揚げよ、主我が神よ、爾は至りて大なり、爾は光栄と威厳とを被  
れり。爾は光を袍の如くに衣、天を幔の如くに張る、水の上に爾の宮を建て、雲を爾の車と爲し、  
風の翼にて行く。爾は風を以て爾の使者と爲し、焰を以て爾の役者と爲す。爾は地を固き基に建  
てたり、此れ世世に動かざらん。爾は淵を以て衣服の如くに之を覆へり、山の巔に水立つ。爾  
の恐嚇に依りて此れは奔り、爾の雷の聲に由りて速に去る、山に升り、澗に降り、爾の此れが  
爲に定めし處に至る。爾界を立てて之を踰えざらしむ、反りて地を覆はざらん。爾は泉を澗に遣  
せり、山の間には水は流れ、野の諸の獣に飲ましむ、野の驢は其渴を止む。空の鳥は其

傍<sup>かたわら</sup>に棲み、枝の間より聲を出す。爾は上なる宮より山を潤し、地は爾の造工<sup>むぎ</sup>の巢<sup>の</sup>にてあき足れり。爾は草を獣<sup>けもの</sup>の為に生ぜしめ、野菜を人の需<sup>もち</sup>の為に生ぜしめて、地より食物を出さしむ。酒は人の心を樂ませ、膏<sup>あぶら</sup>は其面<sup>そのおもて</sup>を澤<sup>うるお</sup>し、餅<sup>もち</sup>は人の心を養ふ。主の樹、其植えたるリワンの柏香木<sup>はくこうぼく</sup>はあき足れり、鳥は其上に巢を造る、松は鶴の棲處<sup>すまひか</sup>たり、高き山は鹿の爲、磐石<sup>いわお</sup>は兔の為に避所<sup>かくれが</sup>たり。主は月を造りて 時を定め、日は其入る處<sup>ところ</sup>を知る。爾暗<sup>くらやみ</sup>を布けば、則<sup>すなわち</sup>夜あり、其時<sup>そのとき</sup>林の獸皆出て廻る、獅は獲物の為に吼えて、其食を神に乞ふ。日出づれば、彼等集りて己の穴に伏す。人は其工作<sup>そのわざ</sup>の爲に出て、勞<sup>はたら</sup>きて暮に至る。主よ、爾の工業<sup>しご</sup>は何ぞ多き、皆智慧を以て作れり、地は爾の造物にて満ちたり。夫の天<sup>あそひ</sup>にして廣き海、彼處には無数の動物、大小の生物あり、彼處には舟通ひ、彼處<sup>かしこ</sup>には彼の大魚<sup>たいぎよ</sup>あり、爾造り其中<sup>そのうち</sup>に遊ばしむ。彼等は皆爾が時に随ひて食<sup>あは</sup>を予ふるを待つ。之に予ふれば受け、爾の手を開けば賜<sup>たま</sup>にあかせらる、爾の顔<sup>かほ</sup>を隠せば惶れ惑ひ、其氣を取り上ぐれば死して塵に帰る、爾の氣を施せば造られ、爾は又地の面<sup>おもて</sup>を新にす。願くは光榮は世世に主に在らん、願くは主は己の造工<sup>むぎ</sup>の爲に樂まん。彼地を觀れば、地震ひ、山に触れば、煙<sup>たけ</sup>起つ。我生ける中<sup>うち</sup>主に歌ひ、世終るまで我が神に歌はん。願くは我が歌は彼に悦ばれん、我主の爲に樂まん。願くは罪人等は地より消え、不法の者は存するなけん。我が靈<sup>たましい</sup>よ、主を讃め揚げよ。

誦經 光榮は父と子と聖神<sup>お</sup>に帰す、今も何時<sup>いつ</sup>も世世に、「アミン」  
ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ、光榮は爾に帰す。(三次)

【大連禱】

輔祭 我等安和にして主に禱らん、 (詠) 主憐めよ  
 輔祭 上より降る安和と我等が靈<sup>たましい</sup>の救<sup>すくい</sup>の爲に主に禱らん、  
 輔祭 全世界の安和、神の聖なる諸教会の堅立、及び衆人の合一の爲に主に禱らん、  
 輔祭 此の聖堂、及び信<sup>あづしみ</sup>と慎<sup>しん</sup>と神を畏るる心とを以て此<sup>こゝ</sup>に来る者の爲に主に禱らん、  
 輔祭 教会を司る我等の(府)主教( )、司祭の尊品、ハリストスに因<sup>よ</sup>る輔祭職、悉<sup>ことごとく</sup>の教衆、及び衆人の爲に主に禱らん、  
 輔祭 我が国の天皇、及び国を司る者の爲に主に禱らん、  
 輔祭 此<sup>こゝ</sup>の都邑<sup>まち</sup>と凡<sup>みな</sup>の都邑と地方の爲、及び信を以て此<sup>こゝ</sup>の中に居る者の爲に主に禱らん、  
 輔祭 気候順和、五穀豊穰、天下泰平の爲に主に禱らん、  
 輔祭 航海する者、旅行する者、病<sup>うれ</sup>を患ふる者、艱難<sup>かんなん</sup>に遭ふ者、虜<sup>とりこ</sup>となりし者、及び彼等<sup>それら</sup>の救<sup>すくい</sup>の爲に主に禱らん、  
 輔祭 我等諸<sup>もろもろ</sup>の憂愁<sup>うれい</sup>と忿怒<sup>いかり</sup>と危難<sup>あやふき</sup>とを免るるが爲に主に禱らん、  
 輔祭 神よ、爾の恩寵を以て、我等を佑<sup>たす</sup>け救ひ憐み護れよ、  
 輔祭 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互<sup>おの</sup>に各<sup>おの</sup>の身を以て、並<sup>ならび</sup>に悉<sup>ことごとく</sup>の我等の生命<sup>いのち</sup>を以て、ハリストス神に委託せん、  
 (詠) 主爾に  
 司祭 蓋<sup>はたし</sup>凡そ光榮尊貴伏拜は爾父と子と聖神<sup>お</sup>に帰す、今も何時<sup>いつ</sup>も世世に、 (詠) 「アミン」

(詠) [主よ汝に呼ぶのスティヒラ] (1調) 第140聖詠

主よ、爾に呼ぶ、速に我に格子給へ。主よ、我に聴き給へ。主よ、爾に呼ぶ、速に我に格子給へ。爾によぶ時我が禱の聲を納れ給へ。主よ、我に聴き給へ。

願くは 我が禱は香爐の香の如く、爾が顔の前に登り、我が手を擧ぐるは暮の祭の如く納れられん。主よ、我に聴き給へ。

主や汝によぶすみやかに我れにいたりたまえ 主や  
 われに聞きたま え 主や汝に呼ぶすみやかに我れに  
 いたりたまえ 汝に呼ぶときわが祈りの声をいれたま え  
 主やわれに聞きたま え ねがわくはわがいのりは  
 香爐のかおりのごとく 汝が"かんは"せのまえにのほ"り  
 わが手をあぐるはくれの祭のごとくいれられん 主や  
 われにききたま え

(続けて)

しゅ わ くち まもり お わ くちびる もん ふせ たま わ ころよ こしま ことば かたぶ  
 誦經 主よ、我が口に 衛を置き、我が 唇の門を扨ぎ給へ、我が心に 邪なる言に傾き

ふほう おこな ひと とも つみ いいわけ なか  
 て、不法を行ふ人と共に罪の推諉せしむる母れ。<中略>

わ こえ もつ しゅ よ わ こえ もつ しゅ いの わ いのり そのまえ そそ わ うれい そのまえ あらわ  
 我が聲を以て主に籲び、我が聲を以て主に禱り、我が 禱を其前に注ぎ、我が 憂を其前に顯

わ たまいわれ うち よわ とき なんじ われ みち し わ ゆ みち おい かれら ひそか わ  
 せり。我が 靈 我の衷に弱りし時、爾は我の途を知れり、我が行く路に於て、彼等は 竊に我が

ため あみ もう われみぎ め そそ ひとり われ みと もの われ のが ところ わ  
 爲に網を設けたり。我右に目を注ぐに、一人も我を認むる者なし、我に遁るる 所なく、我が

たまい かえりみ もの しゅ われなんじ よ い なんじ われ かくれが い もの ち おい  
 靈を顧る者なし。主よ、我爾に呼びて云へり、爾は我の避所なり、生ける者の地に於

われ ぶん わ よ き たま われはなはだよわ われ はくがい もの すく たま  
て我の分なり。我が籲ぶを聴き給へ、我 甚 弱りたればなり、我を迫害する者より 救ひ 給へ、

かれら われ つよ  
彼等は我より強ければなり。

(句) 我が霊を獄より引出して、我に爾の名を讃榮せしめ給へ、爾恩を我に賜はん時、義人は我を環ら  
ん。

#### 第129聖詠

しゅ われふか ところ なんじ よ しゅ わ こえ き たま  
句 主よ、我深き處より爾に呼ぶ。主よ、我が聲を聴き給へ。

せい しゅ わ くれ いの い われら つみ ゆるし あた たま なんじ ひとりせかい ふっかつ  
聖なる主よ、我が晩の祈を納れて、我等に罪の赦を與へ給へ、爾は獨世界に復活  
を顯しし者なればなり。

ねが なんじ みみ わ いのり こえ き い  
句 願はくは爾の耳は我が禱の聲を聴き納れん。

ひとびと めぐ これ かこ こ うち し ふっかつ しゅ こうえい き  
人人よ、シオンを廻り、之を圍みて、是の中に死より復活せし主に光榮を歸せよ、

かれ われら ふほう すく わ かみ  
彼は我等を不法より救ひたる吾が神なればなり。

しゅ も なんじふほう ただ しゅ たれ よ た しか なんじ ゆるし  
句 主よ、若し爾不法を糾さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、

ひと なんじ まえ つつし ため  
人の爾の前に敬まん爲なり。

ひとびと きた うた ふくはい そのし ふっかつ さんえい くれ てき  
人人よ、來れ、歌ひてハリストスに伏拜し、其死よりの復活を讃榮せん、彼は敵の

いざない せかい すく わ かみ  
誘より世界を救ひたる吾が神なればなり。

われしゅ のぞ わ たましいしゅ のぞ われかれ ことば たの  
句 我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を恃む。

われら なんじ くるしみ よ もろもろ くるしみ まぬが なんじ ふっかつ よ  
ハリストスよ、我等は爾の苦に因りて諸の苦より免れ、爾の復活に因り

ふはい すく しゅ こうえい なんじ き  
て腐敗より救はれたり、主よ、光榮は爾に歸す。

#### 又自調の讃頌 第八調

わ たましいしゅ ま ばんにん あさ ま ばんにん あさ ま はなはだ  
句 我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

こんにちじごく さまよ よ われも うま もの う われ ため  
今日地獄は呻きて呼ぶ、我若しマリヤより生れし者を受けざりしならば、我の爲に

ぜん 善かりしならん、<sup>けだしかれ われ いた</sup>蓋 彼は我に至りて、<sup>わ けん ほろぼ</sup>我が權を滅し、<sup>あかがね もん やぶ</sup>銅の門を破り、<sup>かみ</sup>神たる

によりて、<sup>わ さき とら</sup>我が曩に収へたる<sup>もろもろ たましい</sup>諸の靈を復活せしめたり。<sup>しゅ こうえい なんじ</sup>主よ、光榮は爾の

<sup>じゅうじかおよ なんじ ふっかつ き</sup>十字架及び爾の復活に歸す。

句 <sup>ばんみん しゅ ほ あ</sup>萬民よ、主を讃め揚げよ、<sup>ばんぞく かれ あが ほ</sup>萬族よ、彼を崇め讃めよ。

<sup>こんにちじごく うめ よ</sup>今日地獄は呻きて呼ぶ、<sup>われし もの ごと ししゃ う</sup>我死せし者の如くに死者を受けしに因りて、<sup>わ けん ほろ</sup>我が權は滅びた

り、<sup>けだしあえ こ もの とど あた</sup>蓋 敢て此の者を留むる能はず、<sup>すなわちかれ とも わ けんか ぞく もの うしな</sup>乃 彼と偕に我が權下に属せし者を失ふ、

<sup>われこせい ししゃ も</sup>我古世より死者を有たり、<sup>しか み こ もの しゅう おこ</sup>然れども視よ、此の者は衆を起す。<sup>しゅ こうえい なんじ</sup>主よ、光榮は爾の

<sup>じゅうじかおよ なんじ ふっかつ き</sup>十字架及び爾の復活に歸す。

句 <sup>けだしかれ われら ほどこ あわれみ おおい</sup>蓋 彼が我等に施す<sup>しゅ しんじつ なが そんな</sup>憐は大なり、主の眞實は永く存す。

<sup>こんにちじごく うめ よ</sup>今日地獄は呻きて呼ぶ、<sup>われ けん の</sup>私の權は吞まれたり、<sup>ぼくしゃ じゅうじか てい</sup>牧者は十字架に釘せられてアダムの

<sup>おこ</sup>起せり、<sup>わ けんか ぞく もの うば</sup>我が權下に属せし者は奪はれ、<sup>われか の もの みなは いた</sup>我勝ちて吞みたる者を皆吐き出せり、<sup>てい</sup>釘せ

<sup>もの はか むな</sup>られし者は墓を空しくせり、<sup>し けん ちから うしな</sup>死の權は力を失ふ。<sup>しゅ ひかりなが なんじ じゅうじかおよ</sup>主よ、光永は爾の十字架及

<sup>なんじ ふっかつ き</sup>び爾の復活に歸す。

#### 光榮は父と子と聖神に歸す。 第六調

大いなるモイセイは此の日を奥密にし前兆して曰くへり、神は第7日を祝せりと、蓋此は祝せられしスポタ此は安息の日なり。此の日に神の独生の子は其の悉くの工を終え、嘗て定めし死に藉りて肉体にて安息せり。復活を以て彼は救の姿に回りにて、我等に永遠の生命を賜へり、独り仁慈にして人を愛する主なればなり。(樂譜は次ページ)

ザピエフ

えい  
光 榮 は 父と子と 聖 神 に 帰 す、

大いなるモイセイは 此の日を奥密に前兆して 曰 え ーり、

神は 第7日を <sup>しゅく</sup>祝 せりと。 蓋これは 祝せられしスボタ

此の日は安息の 日なり。 此の日に 神の独生子は

<sup>ことごと</sup>悉くの <sup>わざ</sup>工を 終えて、 かつて定めし 死に <sup>よ</sup>藉りて、

肉体にて 安息 せーり。 復活を 以て

もとの姿にかえりて、 我等に永遠の生命を 賜えーり、

独り仁慈にして、 人を愛する 主なれば なーり。

ザピエフ

いまも いつも 世—世—に アミン

続けて

ひとより生れて主宰を生みし全世界の光栄と天の門  
マ シュカイ

なる童貞女マリヤ諸神使のうた諸信者のかざり  
マリア ヨシシ

なるものをほめうとゞべしかれは天とひとしく

神の宮とひとしき者としてあらわれたりかれはあだ  
カミ ミヤ モト

のへだてをやぶり和睦を結び国をひらけりわれらは  
ワガク ムス

かれを信の固めとなし彼より生れし主をふせぎまもるもの  
シン マツ

となすいさめよ神の民やいさめよ主はてき  
カミ タミ

にかたん全能者なればなり  
ゼンノウシヤ

**[聖入]**

司祭 睿智、謹みて立て。

(詠) 聖にして福たる常生なる、天の父の聖なる光栄の穩なる光イイスス・ハリストスよ、我等日の入に至り、晩の光を見て、神父と子と聖神<sup>o</sup>を歌ふ。 生命を賜ふ神の子よ、爾は何時も敬虔の声にて歌はるべし、 故に世界は爾を崇め讃む。

(Varlaam Rospev/setting Maria M.)



聖にして 福く たーる  
 常生なる 天の父の 聖なる 光 栄 の  
 穩やかなる ひかり イイススハリストース や、  
 われら 日の入りに いたり 暁の ひかりを 見て、  
 かみ ちちと せい しんを うたー う  
 生 命 を 賜 う 神 の 子 や、  
 なんじは いつも 敬 虔の 声 にて 歌 わる べし  
 ゆえ せ かい は なんじ あが ほ  
 故 に 世 界 は 爾 を 崇 め 讃 む

司祭 謹みて聴くべし。

【創世記】 1:1~13

【イサイヤの預言書】 60:1~16

【エジプトを出づるの記】 12:1~11

【イオナの預言書】 1:1~4:11

【イイスス・ナヴィンの記】 5:1~15

【エジプトを出づるの記】 13:20~15:19

誦経 ……モイセイ及びイズライリの諸子は此の歌を主に謳ひて曰へり、主に謳はん

(詠) 彼厳かに光栄を顕したればなり。(句の間に繰り返す)

彼厳かに 光 えいを あらわし たればなり

誦経 光栄は父と子と聖神に帰す、主に謳はん、

(詠) 彼厳かに光榮を顯したればなり

誦經 今も何時も世々にアミン

(詠) 彼厳かに光榮を顯したればなり

【ソフォニヤ】 3:8~15

【列王記】 3:17/8~24

【イサイヤの預言書】 61:10~62:5

【創世記】 22:1~18

【イサイヤの預言書】 61:1~9

【列王記】 4-4:8~37

【イサイヤの預言書】 63:11~64:5

【イエレミヤの預言書】 31:31~34

【ダニイルの預言書】 3:1~88

誦經 爾は天のおおぞらに崇め讃められ世々に尊まれ讃め揚げらる

(詠) 主を歌ひて世々に讃め揚げよ、



かれを う た いて 世 世 に 讃 め 揚 げ よ。

誦經 主の悉くの造物は主を崇め讃めよ、

(詠) 彼を歌ひて世々に讃め揚げよ、



かれを う た いて 世 世 に 讃 め 揚 げ よ。

(交互に歌う)

誦經 光榮は父と子と聖神に帰す、主に謳はん、

(詠) 彼を歌ひて世々に讃め揚げよ、

誦經 今も何時も世々にアミン

(詠) 主を歌ひて世々に讃め揚げよ、

誦經 我等主を尊み、崇め讃め彼に伏拝し

(詠) 歌ひて無窮の世に讃め揚げよ、



歌 いて 無 窮 の 世 世 に 讃 め 揚 げ よ。

【小聯禱】

我等復又安和にして主に禱らん。

(詠) 主憐めよ。

神よ、爾の恩寵を以て我等を助け救ひ憐み護れよ。

(詠) 主憐めよ。

至聖至潔にして至りて讃美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、

我等己の身及び互に各の身を以て、并に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん。(詠)

主爾に

司祭高聲 蓋權柄及び國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に。(詠)「アミン」

輔祭、主よ、敬虔なる者を救ひ、及び我等を聆き納れ給へ。

(詠) 主よ、敬虔なる者を救ひ、及び我等を聆き納れ給へ。

輔祭、世々に。

(聖なる神の代りに) 三度繰返す

ハリストス によつて洗を受けしもの ハリストスを衣たりアリルイヤ  
光榮は父と子と聖神に歸す今もいつも世々にアミン ハリストス  
を衣たりアリルイヤ ハリストス によつて洗を受けしもの  
ハリストスを衣たりアリルイヤ

【ポロキメン】5調

至上者よ、願わくは全地は爾に叩拝し、爾を歌ひ、爾の名に歌はん。

(句) 全地よ、神に歡びて呼び、其の名の光榮を歌へよ。

至上者よ願わくは全地は爾に叩拝し爾を歌ひ、爾の名にうたわん

【使徒経】ロマ 6:3~11

けいてい われら おい せん う もの みなかれ し おい せん う  
兄弟よ、我等ハリストスに於て洗を受けし者は、皆彼の死に於て洗を受けし

なり。故に我等は死に於ける洗を以て彼と偕に葬られたり、ハリストスが父の光榮

を以て死より復活せし如く、斯く我等も新にせられたる生命を度らん爲なり。蓋

われらも かれ し なら もつ かれ せつごう すなわちふかつ なら もつ  
我等若し彼の死に效ふを以て、彼と接合せられしならば、乃復活に效ふを以ても、

せつごう けだしわれらし われら ふる ひと かれ とも てい つみ みほろぼ  
接合せらるべし。蓋我等知る、我等の舊き人は彼と偕に釘せられたり、罪の身滅

われらまたつみど されて、我等復罪の奴とならざらん爲なり、死せし者は罪より釋かれしに因る。我等若し  
 とも し のりまたかれ とも い しん けだしし し  
 ハリストスと偕に死せば、則亦彼と偕に生きんことを信ず、蓋知る、ハリストスは死  
 ふっかつ またし し またかれ しゅ かれ し つみ ため ひとたびし  
 より復活して復死せず、死は復彼に主たらざるを、彼の死せしは罪の爲に一次死し、  
 かれ い かみ ため い か ごと なんじら おのれ もつ  
 彼の生くるは神の爲に生くればなり。是くの如く爾等も、己を以て、ハリストスイ  
 われら しゅ あ つみ ため し かみ ため い もの おも  
 イスス我等の主に在りて罪の爲に死し、神の爲に生くる者と意へ。

【アリルイヤの代わり】(これを歌う間に祭服や被いを白に変える)

誦経 神よ、起きて地を裁判せよ、爾万民を継がんとすればなり。

かみよ、起きて地を裁判せよ  
 なんじ 萬民を 継がんと すれば なり。

- (句) 神は諸神の会に立ち、諸神の中に裁判を行へり。
- (句) 爾等義を以て裁判せず、悪者の臆をむかふること何の時に至か。
- (句) 貧しき者と孤の為に裁判を行へ、窘しめらるる者と乏しき者に義を施せ。
- (句) 乏しき者と貧しき者を扶け、之を悪者の手より抜け。
- (句) 彼等は知らず、悟らずして闇冥を行く。
- (句) 地の基皆震ふ。我曰へり、爾等神なり、爾等皆至上者の子なり、然れども爾等人の如く死し、諸侯の一の如くたおれん。

誦経 神よ、起きて地を裁判せよ、

詠隊 爾 萬民を継がんとすればなり。

【マトフェイによる福音書】28:1~

スボタす なぬか はじめ ひ よあけ た はか み ため  
 安息日過ぎて、七日の首の日の黎明に、マリヤ「マグダリナ」と他のマリヤと墓を觀ん爲  
 きた み ちおおい ふる けだししゅ つかいてん くだ つつ はか もん いし  
 に来れり。視よ、地大に震へり、蓋主の使天より降り、就きて、墓の門より石  
 うつ そのうえ ざ そのかたち いなづま ごと そのころも しろ ゆき ごと まも  
 を移して、其上に坐せり。其容は電の如く、其衣は白きこと雪の如し。守る  
 もの かれ おそ おのの し もの ごと てんしおんな むか い なんじらおそ  
 者は彼を懼れ、戦きて、死せし者の如くなれり。天使婦に對ひて曰へり、爾等懼

なる<sup>なか</sup>勿<sup>われ</sup>れ、我<sup>なんじら</sup>爾<sup>じゅうじか</sup>等<sup>てい</sup>が十字架<sup>たす</sup>に釘<sup>し</sup>せられしイイススを尋<sup>かれ</sup>ぬるを知る。彼<sup>ここ</sup>は此<sup>あ</sup>に在<sup>あ</sup>らず、  
 蓋<sup>い</sup>其<sup>その</sup>言<sup>い</sup>ひし如<sup>ごと</sup>く、復<sup>ふ</sup>活<sup>かつ</sup>せり、來<sup>きた</sup>りて主<sup>しゅ</sup>の置<sup>お</sup>かれし處<sup>ところ</sup>を觀<sup>み</sup>よ、且<sup>かつ</sup>速<sup>すみ</sup>に往<sup>ゆ</sup>きて、其<sup>その</sup>  
 門<sup>もん</sup>徒<sup>と</sup>に告<sup>い</sup>げて曰<sup>い</sup>へ、彼<sup>かれ</sup>死<sup>し</sup>より復<sup>ふ</sup>活<sup>かつ</sup>せり、爾<sup>なんじら</sup>等<sup>さき</sup>に先<sup>ゆ</sup>だちてガリレヤ<sup>なんじら</sup>に往<sup>ゆ</sup>く、爾<sup>なんじら</sup>等<sup>かしこ</sup>彼<sup>こ</sup>處<sup>こ</sup>に  
 於<sup>おい</sup>て彼<sup>かれ</sup>を見<sup>み</sup>んと、視<sup>み</sup>よ、我<sup>われ</sup>爾<sup>なんじら</sup>等<sup>い</sup>に言<sup>い</sup>へり。婦<sup>おん</sup>急<sup>ない</sup>ぎて墓<sup>はか</sup>を離<sup>はな</sup>れ、懼<sup>おそ</sup>れ且<sup>かつ</sup>大<sup>おおい</sup>に喜<sup>よろこ</sup>び  
 て、其<sup>その</sup>門<sup>もん</sup>徒<sup>と</sup>に報<sup>ほう</sup>ぜん爲<sup>ため</sup>に趨<sup>はし</sup>り往<sup>ゆ</sup>けり。彼<sup>かれ</sup>等<sup>ら</sup>が門<sup>もん</sup>徒<sup>と</sup>に報<sup>ほう</sup>ぜん爲<sup>ため</sup>に往<sup>ゆ</sup>ける時<sup>とき</sup>、視<sup>み</sup>よ、イイ  
 スス之<sup>これ</sup>に遇<sup>あ</sup>ひて曰<sup>い</sup>へり、慶<sup>よろこ</sup>べよ、彼<sup>かれ</sup>等<sup>ら</sup>就<sup>つ</sup>きて、其<sup>その</sup>足<sup>あし</sup>を抱<sup>いだ</sup>きて、彼<sup>かれ</sup>を拜<sup>はい</sup>せり。イイスス  
 之<sup>これ</sup>に謂<sup>い</sup>ふ、懼<sup>おそ</sup>るる勿<sup>なか</sup>れ、往<sup>ゆ</sup>きて、我<sup>わ</sup>が兄<sup>けい</sup>弟<sup>てい</sup>に報<sup>ほう</sup>じて、ガリレヤ<sup>ゆ</sup>に往<sup>ゆ</sup>かしめよ、彼<sup>かれ</sup>等<sup>ら</sup>彼<sup>かしこ</sup>處<sup>こ</sup>  
 に於<sup>おい</sup>て我<sup>われ</sup>を見<sup>み</sup>ん。婦<sup>おん</sup>の往<sup>ゆ</sup>く時<sup>とき</sup>、視<sup>み</sup>よ、番<sup>ばん</sup>兵<sup>べい</sup>の中<sup>うち</sup>の或<sup>ある</sup>者<sup>もの</sup>城<sup>まち</sup>に入<sup>い</sup>りて、有<sup>あ</sup>りし事<sup>こと</sup>を以<sup>もつ</sup>  
 て、悉<sup>ことごと</sup>く、司<sup>し</sup>祭<sup>さい</sup>諸<sup>しよ</sup>長<sup>ちやう</sup>に告<sup>つ</sup>げたり。彼<sup>かれ</sup>等<sup>ら</sup>は長<sup>ちやう</sup>老<sup>らう</sup>等<sup>ら</sup>と與<sup>とも</sup>に集<sup>あつ</sup>まり、相<sup>あい</sup>議<sup>ぎ</sup>して、多<sup>おほ</sup>く  
 の銀<sup>ぎん</sup>を兵<sup>へい</sup>卒<sup>そつ</sup>に給<sup>あた</sup>へて曰<sup>い</sup>へり、爾<sup>なんじら</sup>等<sup>い</sup>云<sup>い</sup>へ、我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>が寝<sup>とき</sup>ねたる時<sup>その</sup>、其<sup>その</sup>門<sup>もん</sup>徒<sup>と</sup>夜<sup>よる</sup>來<sup>きた</sup>りて、彼<sup>かれ</sup>を  
 竊<sup>むす</sup>めりと、若<sup>も</sup>し此<sup>こ</sup>の事<sup>こと</sup>方<sup>ほう</sup>伯<sup>はく</sup>に聞<sup>き</sup>えば、我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>彼<sup>かれ</sup>に勸<sup>すす</sup>めて、爾<sup>なんじら</sup>等<sup>ら</sup>に虞<sup>うれ</sup>なからしめん。彼<sup>かれ</sup>等<sup>ら</sup>  
 銀<sup>ぎん</sup>を取<sup>と</sup>りて、教<sup>おし</sup>へられし如<sup>ごと</sup>く行<sup>おこな</sup>ひたり、是<sup>ここ</sup>に於<sup>おい</sup>て斯<sup>こ</sup>の言<sup>ことば</sup>はイウデヤ人<sup>じん</sup>の中<sup>うち</sup>に傳<sup>つた</sup>は  
 りて、今<sup>こんにち</sup>日に至<sup>いた</sup>れり。十<sup>じゅう</sup>一<sup>いち</sup>の門<sup>もん</sup>徒<sup>と</sup>ガリレヤ<sup>ゆ</sup>に往<sup>ゆ</sup>きて、イイススの彼<sup>かれ</sup>等<sup>ら</sup>に命<sup>めい</sup>ぜし山<sup>やま</sup>に至<sup>いた</sup>  
 り、彼<sup>かれ</sup>を見<sup>み</sup>て拜<sup>はい</sup>せり、然<sup>しか</sup>れども猶<sup>な</sup>疑<sup>お</sup>へる者<sup>もの</sup>ありき。イイスス就<sup>つ</sup>きて、彼<sup>かれ</sup>等<sup>ら</sup>に語<sup>い</sup>げて曰<sup>い</sup>  
 へり、天<sup>てん</sup>に在<sup>あ</sup>り地<sup>ち</sup>に在<sup>あ</sup>る一切<sup>いっさい</sup>の權<sup>けん</sup>は我<sup>われ</sup>に與<sup>あた</sup>へられたり、故<sup>ゆえ</sup>に爾<sup>なんじら</sup>等<sup>ら</sup>往<sup>ゆ</sup>きて、萬<sup>ばん</sup>民<sup>みん</sup>に教<sup>おし</sup>  
 を傳<sup>つた</sup>へて、彼<sup>かれ</sup>等<sup>ら</sup>に父<sup>ちち</sup>と子<sup>こ</sup>と聖<sup>せい</sup>神<sup>しん</sup>との名<sup>な</sup>に因<sup>よ</sup>りて洗<sup>せん</sup>を授<sup>さず</sup>け、彼<sup>かれ</sup>等<sup>ら</sup>を教<sup>おし</sup>へて、我<sup>わ</sup>が一切<sup>いっさい</sup>爾<sup>なんじ</sup>  
 等<sup>ら</sup>に命<sup>めい</sup>ぜし事<sup>こと</sup>を守<sup>まも</sup>らしめよ、視<sup>み</sup>よ、我<sup>われ</sup>恒<sup>つね</sup>に爾<sup>なんじら</sup>等<sup>ら</sup>と偕<sup>とも</sup>にして世<sup>よ</sup>の終<sup>おわり</sup>末<sup>あ</sup>まで在<sup>あ</sup>るなり、  
 「アミン」。

詠<sup>しゅ</sup>隊<sup>たい</sup> 主<sup>こう</sup>よ、光<sup>えい</sup>榮<sup>なん</sup>は爾<sup>き</sup>に歸<sup>き</sup>す、光<sup>えい</sup>榮<sup>なん</sup>は爾<sup>き</sup>に歸<sup>き</sup>す。

## 以下ワシリーの聖体礼儀

ただし、「ヘルビムの歌」に代えて、「常に福に代えて」、領聖詞は以下の通り



ひとのにくたいは ことごとくもだ—し、  
おそれ 戦のきて 立つべし、 いつも地のことを  
己のうちに思 うべから—ず、  
けだし 王の王、 主の主—は ほふられて、  
信者の食 に 与えられん為 に 来た—り。  
アミン 天 軍は 凡その主制及び 権柄 とともに、  
多 目のヘルビム と 六翼のセラフィムとは  
面を覆い、彼に先立ちて歌いて曰う、 ア—ルルイヤ  
アリルイヤ アリルイヤ ア—ルルイヤ アリルイヤ アリルイヤ

【アナフォラ】

司祭 正しく立ち、畏れて立ち、敬みて安和にして聖なる捧げ物を奉らん

詠隊 安和の隣、讃揚の祭を、

司祭 高聲 願くは我が主イイスス ハリストスの恩み、神・父の慈、聖神の親しみは、爾衆人と偕に在らんことを、

詠隊 爾の神とも、

司祭 心上に向ふべし、

詠隊 主に向へり、

司祭 主に感謝すべし、

詠隊 父と子と聖神、一体にして分れざる三者に伏し拝むは当然にして義なり、

司祭 首を屈め黙誦して曰く、

永在の主宰、主、神・父、全能者、拝まる者や、爾を讃美し、爾を歌頌し、爾を讃揚し、爾に伏拝し、爾に感謝し、爾独り実在する神を讃栄し、悔悟の心と謙卑の霊とを以て、爾に此の靈智の法事を献ぐるは、誠に当然に誠に義にして、誠に爾が聖位の威厳に適へり、

蓋爾は我等に爾の真実を知るを賜ひし主なり、主宰や、<sup>たれ</sup>執か能く爾の能力を言ひ、爾が悉くの讃美を伝へ、爾が諸時の諸奇蹟を宣ぶるに堪へん、爾は万有の主宰、天と地、見ゆると見えざる万物の主、光栄の宝座に坐し、淵を鑑み、始なく、見る可からず、測る可からず、<sup>かたど</sup>象るべからず、変らざる者、我が主イイスス ハリストス、大なる神及び救世主、我等の特なる者の父なり、彼は爾が至善の像、同形の印、己の中に爾父を顕す者、生活の言、真の神、永遠の智慧、生命・成聖・能力・真の光なり、彼に因りて聖神現はれたり、すなわち真実の神、義子とする恩賜、将来の嗣業の<sup>へいし</sup>聘質、永福の始、生活を施す力、成聖の泉なり、悉くの有言有智の造物は、彼に固められて爾に奉事し、爾に永遠の讃栄を献ず、蓋万有は爾に努む、神使・神使首・宝座・主制・首領、権柄・能力・多目のヘルビムは爾を讃美し、セラフィムは爾を<sup>めぐ</sup>環りて立つ、各々六翼あり、に翼其面を蔽ひ、に翼其足を覆ひ、二翼を以て飛び、緘じざる口、黙さざる讃栄を以て互に相呼ぶ、

永遠にいます主宰、主、神、全能者、拝まる御方よ、あなたを賛美し、あなたを歌いほめ、あなたを讃め上げ、あなたを伏し拝み、あなたに感謝し、唯一の实在の神であるあなたを讃栄し、悔い改めの心と、謙遜の霊によって、あなたに靈智の奉事をささげることは、実に、当然のこと、正しいことであり、聖なる位にまします、厳かなるあなたにふさわしいことです。それは、あなたが私たちにあなたを真に知ることをゆるして下さった主だからです

主宰よ、誰があなたの能力を言い表し、あなたへの讃美の一切を伝え、あなたが時に応じて行われる奇蹟を宣べることができるでしょうか？

あなたは、すべての存在をつかさどる御方、天と地、見えるもの見えないもの一切の主、光栄の宝座におつきになり深淵を見通される御方、始めなく、見る事ができず、把握することができず、描写できず、変わることがない御方、そして、わが主、イイスス・ハリストス、大いなる神にして救世主、私たちのたのみである方の父です。

ハリストスは、あなたの最も善い像、同じ形のしるし、ご自身のうちに父であるあなたを顕す方、生きたことば、まことの神、永遠の知恵、いのち、成聖、能力、そしてまことの光です、この御方によって、聖神が現れたのです。

聖神は、まことの神（霊）であり、私たちに神の子とする贈り物、やがて受け継ぐべき約束の地の保証、永遠の祝福の最初の果実、いのちを生み出す力、成聖の泉です。すべての理性あり知恵ある被造物は、この聖神に堅められ、あなたを礼拝し、あなたに永遠の讃歌を歌います。一切のものはあなたの僕なのです。

神使、神使首、宝座、主制、首領、権柄、能力、多目のヘルビムはあなたを讃美し、セラフィムはあなたをめぐり立ちます。彼らにはそれぞれ六翼があり、その二つは顔を覆い、二つは足を覆い、後の二つで飛び、口を閉ざすことなく、あふれ出る讃美を歌い、互いに呼び交わします。

彼らは、凱歌を歌い、呼び、叫んで言います。

司祭高聲

凱歌を歌ひ、よび叫びて曰ふ、

詠隊 **聖聖なる哉主「サワオフ」、爾の光榮は天地に満つ、至と高きに「オサンナ」、主の名に因りて来る者は崇め讃めらる、至と高きに「オサンナ」、**

此に於ても、輔祭行ふ所、金口制体礼儀と同じ、

司祭黙禱して曰く、人を愛する主宰や、我等罪なる者も、此の福たる軍と偕によびて曰ふ、爾は聖なる哉、誠に至聖なる哉、爾が聖位の威嚴は測り難し、爾は悉くの行為に聖なり、義と真の審判とを以て悉く我等に施しに由る、蓋神や、爾は地より塵を取りて人を造り、爾の像を以て之を貴くし、之を甘美なる地堂に置き、之に爾の誠を守るが為に、死せざる生命と永福の楽しみとを約し給へり、然れども彼は、爾彼を造りし真の神に背き、蛇の誘に迷はされ、己の罪に殺されしにより、神や、爾は義の審判を以て彼を地堂より此の世に逐ひ出し、彼を造るが為に取りたる土に帰し、爾のハリストスを以て、彼が為に復生の救を設け給へり、至善者や、蓋爾は終に至るまで、爾が造りし物より顔を避けず、爾が手の行為を忘れず、乃ち爾が仁慈の憐に因りて、多方を以て之を顧み、預言者を遣し、爾の聖人、累代爾を喜ばし者を以て異能を行ひ、爾の僕 諸預言者の口を以て我等に告げて、預め将来の救を知らしめ、法律を賜ひて助となし、諸神使を立て守護者となし、時の満つるに及びて、我等に告ぐるに爾の子を以てせり、爾は彼を以て世世を造れり、彼は爾が光榮の光、爾が聖位の肖像なり、彼は其能力の言にて万物を扶持して、己を爾神・父にひとしくするを僭ふとせず、然れども永在の神にして地に顕れ、人と偕に在し、聖なる童貞女より身を取り、己を虚くし、僕の形を受け、我等の卑賤の体に肖たる者となり給へり、我等を其光榮の形に肖たる者となさんが為なり、蓋人に因りて罪は世に入り、罪に因りて死も亦入りしにより、爾の独生子、爾 神・父の懷に居る者は、おんな即ち聖なる生神女・永貞童女マリヤより生れ、法律の下に在りて、甘んじて己の身に於て罪を擬定せり、アダムの中に死する者が爾のハリストスの中に復生せん為なり、彼は此の世に居り、救を施す誠命を賜ひ、我等を偶像の惑いより脱し、我等を導きて爾 真の神・父を知るに至らしめ、我等を、選を蒙る族、王たる神品、聖なる民として己に獲て、水を以て我等を浄め、聖神を以て聖にし、己を贖として、我等罪の下に売られたる者を繋ぎし所の死に予へ、己を以て万有を充滿するが為に、十字架に由りて地獄に降り、死の病を釈き、第三日に復活して、凡の肉体の為に死より復活する途を啓き、(蓋腐敗は生命の首を繋ぐ能はず) 死者の中より首生する者として、死せし者の中に首実の果となれり、みずから万有の中に万事の首始たらんが為なり。天に升起、爾が至大位の右に其高きに坐し、再び来りて、各人に、其の行に依りて報い給はん、彼は我等に其の救いを施す苦しみの記憶を遺せり、即ち此の我等が彼の誠めに因りて献げし所の者なり、蓋 己を世界の生命の為に付し夜、其の自由にして永遠に記憶すべき生命を施すの死に出づるに臨みて、其の聖にして至浄なる手に餅を取り、爾 神・父に捧げ、感謝し、祝讃し、成聖し、撃きて、(高聲にして曰く)、其聖なる門徒及び使徒に予へて曰へり、

取りて食へ、是れ我が体、爾等の為に撃かる者、罪の赦しを得るを致す、



詠隊 「アミン」

此にも、司祭輔祭の行ふ所、金口聖体礼儀と同じ、司祭黙誦して曰く、

同く葡萄汁を盛る爵を取りて水を和し、感謝し、祝讃し、成聖して、  
又高聲にして曰く、

其聖なる門徒及び使徒に予へて曰へり、皆之を飲め、是我の新約の血、爾等及び衆くの人  
の為に流さる者、罪の赦しを得るを致す、

詠隊 「アミン」

司祭首を屈め、黙誦して曰く、

此を行ひて我を記憶せよ、蓋 爾等此の餅を食ひ、此の爵を飲む毎に、我の死を伝へ、我の復活を認  
む、主宰や、故に我等も、彼が救を施す苦、生命を施す十字架、三日のほうむり、死よりの復活、  
天に升る事、爾 神・父の右に坐する事、光荣にして畏るべき彼が再度の降臨を記憶して、

(高聲にして曰く)、

爾の賜を、爾の諸僕より、衆の為一切の為に爾に献りて、

詠隊 主や、爾を崇め歌ひ、爾を讃め揚げ、爾に感謝し、我が神や、爾に禱る、

司祭 首を屈め、黙誦して曰く、

至聖なる主宰や、是を以て我等も堪へざる罪僕、我等の義に因るに非ず、(蓋 地に在りて何の善を  
も為さず)乃ち爾が厚く我等に注ぎし爾の慈憐と宏恩とに依りて、爾の聖なる祭壇に奉事するを獲し  
者は、敢て爾の聖なる祭壇に近づき、爾がハリストスの聖体血の真像を献げて爾に祈り、爾をよぶ、  
諸聖の聖なる者や、爾が至善の仁愛に藉りて、爾の聖神を我等及び此の奠へたる祭品に臨ましめ、  
之に祝福し、之を聖にし、之を顕して、輔祭執る所の聖扇或は袱を置き、司祭の側に至り、に人同く聖宝座の前に於て三次躬拝し、  
黙禱して曰く、

神や、我罪人を浄めて、我を憐み給へ、三次

第三時に爾の至聖神を爾の使徒に遣はし至善の主や、之を我等より取り上ぐる事勿れ、尚我等爾  
に祈る者の衷に之を新たにせよ、

(句) 神や、潔き心を我に造り、正しき霊を私の衷に改め給へ、

第三時に爾の至聖神を爾の使徒に遣はし至善の主や、之を我等より取り上ぐる事勿れ、尚我等爾  
に祈る者の衷に之を新たにせよ、

(句) 我を爾の顔より逐ふ事勿れ、爾の聖神を我より取り上ぐる事勿れ、

第三時に爾の至聖神を爾の使徒に遣はし至善の主や、之を我等より取り上ぐる事勿れ、尚我等爾  
に祈る者の衷に之を新たにせよ、

輔祭首を屈め、大帯を執り、聖餅を指し、低聲にして司祭に誦して曰く、

君や、聖餅に祝福せよ、

司祭 聖號を聖餅の上に畫して曰く、

此の餅を將て、主・神・我等の救世主イイスス・ハリストスの真の尊体と為し、

輔祭 「アミン」

又曰く、君や、聖爵に祝福せよ、

司祭 聖号を画して曰く、此の爵を<sup>もつ</sup>て、主・神・我等の救世主イイススハリストスの真の尊血、

輔祭 「アミン」

司祭 世界の生命の為に流されし者と為し、

輔祭 「アミン」 又<sup>また</sup>に聖物を指して曰く、君や、二の物に祝福せよ、

司祭 二聖物に聖號を畫して曰く、爾の聖神を以て之を変化せよ、

輔祭 「アミン」「アミン」「アミン」

乃首を司祭の前に屈めて曰く、聖なる君や、我罪人を記憶せよ、

並に故位に復り、聖扇を執りて聖物を扇ぐこと前の如し、

司祭 祈祷して曰く、

我等衆人同く一餅一爵を領くる者を、唯一の聖神に体合するを以て互に和合せしめ、我が中一人も、  
爾がハリストスの聖体血を<sup>う</sup>領くるを以て、審案或は定罪を得るを致す勿れ、乃ち我等に、古世より  
爾の喜を為し諸聖人・元祖・列祖・太祖・預言者・使徒・伝道者・福音者・致命者・表信者・教師、  
及び凡そ信を以て終りし義なる霊と偕に、慈憐と恩寵とを獲せしめ給へ、

輔祭 香爐を執りて爐儀を聖宝座に行ふ、

司祭 高聲にして曰く、

殊に至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤと偕に、

詠隊 大木曜日及び大「スポタ」には、右の讚詞に易へて本日の第九歌頌「イルモス」を歌ふ、

### 第9歌頌

はは--よ、 我<sup>なんじ</sup>爾が種なくして 孕<sup>はら</sup>みし子の  
ひつぎにあるを 見て 泣く な か れ  
け<sup>だし</sup>だし 蓋、 我<sup>お</sup>起きて 光 榮<sup>い</sup> を 得  
かみなるによつて つねに<sup>しん</sup>信と 愛とを<sup>も</sup>以つて  
爾<sup>なんじ</sup>を 讚<sup>さん</sup>揚<sup>よう</sup>するものを 光榮のうちに た か く せん

司祭 首を屈めて禱りて曰く、

聖預言者・前驅・授洗イオアン、光榮にして讚美たる聖使徒、(当日記憶を為す)所の聖某、及び爾  
が諸聖人と偕に、慈憐と恩寵とを獲せしめ給へ、

神や、彼等の祈禱に因りて我等を顧み、並に凡そ永生の復活の望を懐きて寝りし者を記憶し給へ、  
此に於て、司祭欲する所の生死者を記憶す、生者の為には曰く、

神の僕某の救贖・眷顧・諸罪の赦しの為に禱る、  
死者の為には曰く、

神の僕某の霊の安息の為、之を光る處、悲と歎との遠ざかる所に置くが為に禱る、我が神や、彼等を爾  
が顔の光の照す所に安置安息せしめ給へ、

嗣ぎて曰く、

又爾に禱る、主や、爾の聖・公・使徒の教会、世界の極より極に至る者を記憶し、爾がハリストス  
の尊き血にて獲し所の者を平安にし、及び此の聖なる堂を堅固にして世の終に至らしめ給へ、主や、  
此の祭物を爾に献げし者、及び其誰が為に、誰を以て、誰に代りて献げしを記憶せよ、主や、爾の  
諸聖堂に物を献り、善業を行ひ、及び貧者を記憶する者を記憶して、爾が豊なる天上の恩賜を以て  
彼等に酬い、天の物を以て地の物に易へ、永遠の物を以て暫時の物に易へ、不朽の物を以て腐敗の  
物に易へて彼等に賜へ、主や、曠野・山嶺・巖穴・地窟に在る者を記憶せよ、主や、童貞・敬虔・  
禁食・潔淨を以て生を度る者を記憶せよ、主や、我が今上皇帝が斯の地に王たるを嘉せし者を記憶  
し、真実の武具、仁慈の武具を彼に佩ばしめ、戦の日に於て其の首を覆ひ、其臂を強くし、其右の  
手を高くし、其国を堅固にし、凡そ戦を欲する異邦民を彼に帰服せしめ、奪ふべからざる深き平安  
を彼に賜ひ、彼の心に爾が教会の為、及び爾が衆人の為に善事を告げ給へ、彼の平和により、我等  
が凡その敬虔と潔淨とを以て、恬靜安然として生を度らんが為なり、主や、我が皇后皇太子皇族を  
記憶せよ、主や、百官有司、帝国議會及び皇軍を記憶せよ、善なる者を善に守り、悪なる者を爾の  
仁慈を以て善なる者となし給へ、主や、此に立つ衆人、及び已む能はざる故に因りて来らざる者を  
記憶し、爾が慈憐の多きに因りて、彼等と我等とを憐み給へ、彼等の庫に諸の善物を盈たし、彼等  
の夫婦を平和と同心とに護り、嬰兒を養育し、少年を訓導し、老者を扶持し、心狭みたる者を慰め、  
散じたる者を聚め、迷はされし者を帰して、爾が聖・公・使徒の教会に合はせ給へ、汚鬼に苦めら  
る者を釋き、航海する者と偕に航海し、旅行する者と偕に旅行し、やもめを庇ひ、みなしごを護り、  
虜となりし者を救ひ、病を患ふる者を醫し給へ、神や、裁判・鉞山・流罪・苦役、及び凡そ憂愁と  
患難と危難とに居る者を記憶せよ、主我が神や、凡そ爾の大なる愛憐を求むる者、又我等を愛する  
者、我等を悪む者、我等当らざる者に代り祈るを託せし者、及び爾の衆人を記憶し、衆に爾の豊な  
る慈憐を注ぎ、衆に其求むる所、凡そ救の為に切要なる者を予へ給へ、神や、我等知らざるにより、  
或は忘るにより、或は名の多きによりて記憶せざる者は、爾各人の生長と姓名とを知り、各人を其  
母の胎内より知るを以て、親ら之を記憶せよ、蓋主や、爾は助なき者のたすけ、望なき者ののそみ、  
颶風に遭ふ者の救者、航海する者のみなど、病を患ふる者の医師なり、爾親ら衆人の為に、各其求  
むる所となり給へ、蓋各人を知り、其願と其家と其需とを知ればなり、主や、此の都邑と凡の都邑と  
地方とを、飢饉・疫病・地震・水難・火難・劍難・外攻・内乱を救ひ給へ、

高聲にして曰く、

主や、殊に教会を司る至聖なる会院(シノド) [尊貴なる我らの東京の大主教全日本の府主教ダニエル]  
を記憶し、彼等を平安・無難・尊貴・壮健・長寿なる者、及び爾が真実の言を正しく伝ふる者  
として、爾の聖なる教会に与へ給へ、

詠隊 衆人をも、

輔祭 生者冊に循ひて生者の名を記憶す、

司祭黙禱して曰く、

主や、爾が真実の言を正しく伝ふる正教者の凡その主教品を記憶せよ、主や、爾が慈憐の多きに因りて、我不当の者をも記憶し、我に凡そ自由による自由によらざる罪過を赦し給へ、我が諸罪に因りて、爾が聖神の恩寵の、奠へたる祭品に臨むを遏むる勿れ、主や、司祭品、ハリストスに因る輔祭品、及び悉くの神品を記憶し、我等爾の聖なる祭壇に環り立つ者の中、ひとりをも羞を承けしむる勿れ、主や、爾の仁慈を以て我等を顧み、爾の豊なる恩恵を以て我等に現れ、順和にして利益を為す氣候を我等に賜ひ、地の豊作を為す甘雨を賜ひ、爾の恩沢を以て年に冠らし、爾が聖神の力を以て諸教会の分岐を治め、異邦民の驕暴を鎮め、諸異端の紛起を速かに壊り給へ、主我が神や、我等衆人を爾の国に入れて、光の子昼の子と顕はし、爾の平安と爾の愛とを我等に賜へ、蓋爾は万事を以て我等に予へり、

高聲にして曰く、

並に我等に、口を一にし心を一にして、爾父と子と聖神の至尊至嚴の名を讃栄讃頌するを賜へ、今も何時も世世に、

詠隊 「アミン」

司祭転じて門に向ひ、衆人に祝爾して曰く、

願くは大なる神、我が救主イイススハリストスの憐は、爾衆人と偕に在らんことを、

詠隊 爾の神(しん)とも、

領聖詞、第四調、

主は寝ぬる者の覺むるが如く興き、我等を救ふ者は復活せり。「アリルイヤ」、三次。

主は寝ぬるものの覺むるごとく興き  
われらをすくうものはふっかつせり  
ア-リルイヤ アリルイヤ アリルイヤ  
ア-リルイヤ アリルイヤ アリルイヤ